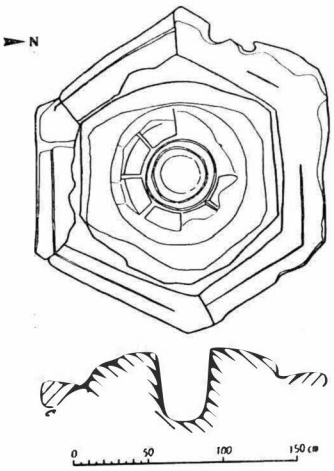
とがわかつた。この部分は当初寺地内として予期しなかつたほど北に離れているが、出土の瓦類も中心部と変りなく、この建物の北に川原寺の瓦窯があるといわれているので川原寺の附属建物の一つであることが考えられる。

六　遺　物

遺物の点では第一次、第二次の調査で知られたものと全く同様の瓦類が多数出土したが、すべて平安後期までのもので、建久2年の火災では北半の施設が復旧されなかつたことを示している。ただ土釜その他日常土器類の多かつたことは僧侶の居住地区であつたことを示しているのであろうか。

以上今回の調査で講堂を繞る大規模な三面僧房があり、その他に多数の附属建物の遺存を予測させられるにいたつたが、一応川原寺中枢部の調査を打切ることにした。これで三次にわたる発掘調査の終了をみたわけであるが、わが国上代伽藍の配置形式に新例を紹介し得たこと、現在知り得た最古の三面僧房の平面間取りを究明し得たことは、川原寺発掘調査の成果として斯界に資することであろう。寺院地北部で検出された北方建物は、川原寺の附属建物の一つと考えられるが、その性格は不明であり、他の附属建物とともに、今後の調査を俟ちたい。

（工藤圭章）

興福寺中金堂前の燈籠台石

興福寺中金堂の前の階段の最下段より南に5mのところに燈籠台石があり、昭和34年2月に寺が清掃した。それが八弁の蓮座をもつ花崗岩製で室町時代のものと推定された。また別にその周囲に幅20〜40cmの凝灰岩を六角形に組合した、径2.2mの燈籠台石下の布石もあることが判明した。これは現地表下15cmにあり、地層の点から創建時ではなく、平安時代頃のものと考えられた。